# 七月総評

立花　開

唇は残らない　昼の火葬場　　合川秋穂　東京都

唇に骨はない。主体が一番触れたかった箇所は肉であったから、焼けてなくなってしまった。肉、それも唇に触れられるような近い間柄であったことが伺える。茶毘に付し、骨上げをする際に真っ先に思い知った、二度と味わえない温かみ。

光は目を探して飛び降りつづける　　立花ばとん　東京都

私たちは無意識化においても他への認識を人間優位で捉えている。暗闇のなかで明るい場所を探すようで、本当は相互に探し合っているのだ。だから油断してはいけない。闇もまた目を探して飛び続けている。闇と先に目が合えば、囚われてしまう。

犯行の時刻にアブラナを揺らす
どの爪を噛んでも錆びの味がする　　松下　誠一　東京都

誰がどこで、何の罪を犯しているのかわからないけれど、「犯行の時刻」を知っているなら同罪だろう。何のアリバイにもならない「アブラナを揺らす」行為。共に落ちてゆくことを望んでいるのかもしれない。この「時刻」は夜な気がする。湿った風に紛れながら、アブラナを揺らす。

夏の朝トースト裏のやわらかさ　　杢いう子　佐賀県

トースター、トーストのこんがり焼けた表面と水分を集めやわらかくなった白いままの裏側、それに触れる指や体、朝陽が射しこむ窓、外の新緑。営みとは立体的である。「草生えるw」／「バセリは少しありますか」、半夏生まばたきだって水の音、の二作品も心惹かれた。

スカートの丈

もう少し長くしたら？
宇宙にそっと言い聞かせてみる

うろ仔　北海道

夜空を見上げるとき、たっぷりのドレープが施された一枚の布のようだと思うときがある。その布が誰かが履いているスカートで、私たちはその内側にいるのだろうか。すそが舞い上がった“向こう側”は見てはいけない。私たちは知らずに守られている。

蝉の声と寝息
雨戸は開く前
冒険と孤独を知る
最後に子供だった朝

頼田　昴　神奈川県

気が付いたら子供でいられなくなり、その日々の記憶もいつの間にか遠ざかっている。大人になってからの日々の方が果てしなく長い。皆が寝ている中の蝉の声、閉じられた雨戸が作りだした暗がりの中にのみいる何かの気配。解説とは時に無粋なもので、言語化せずに漂う中でしか生存できないものも多い。記憶を味わう作品。

振りかぶる瞬間
君は海になり
バレーボールの月を捉える

Flim　神奈川県

本当は一瞬の出来事なのだけれど、見開いた目と「バレーボール」の動きの力強さ、集中によって時間が引き延ばされる感覚の表現が面白い。君＝海、月はやや凡庸な表現かもしれないが、眼球の水分が凪いだ海のように白いバレーボールを映し出す臨場感が伝わる。

悲しみはもう必要ないよ
ここは首を落とされた
向日葵の立ち並ぶ花畑

香取小春　宮崎県

喜びも悲しみも感じる権利は本人のみにある。優しさの皮を被った底の見えない支配欲。しかしその“皮”もぶよぶよとして本体に馴染んではいなさそうだ。切り落とされた「向日葵」の花の部分は誰も脅かしてはいけない部分だったもの。

汗ばみの君は木陰で
ニュートンになる

涼木　和貴　北海道

どの存在にも重力はあるのだけれど、ひとつひとつを意識しながら生活はしていない。「君」が突然「ニュートン」になったのではなく、そのように見る主体の心が発生したことにより存在感が増したのである。「汗ばみの君」はやや助詞に負荷がかかるが、名詞にすることで君の輪郭やそこを伝う汗がくっきりと見える。

イヤホン無しの帰り道は
現実を聞いて帰るしか無いのよね

四ツ目　北海道

行き交う車の音が空間の奥行きを作り、鳥や子供たちの声が時間を作る。私たちが聴くものは音楽だけではないことを思い出しても、どこでも音楽を楽しむことのできる豊かさが現実を翳ませる。鮮やかな発見とそれによって見えた影。